

---

# 仮面ライダー電王

諒夏

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

仮面ライダー電王

### 【Nコード】

N5644C

### 【作者名】

諒夏

### 【あらすじ】

姉妹がミルクディッパーでお茶をしていた所にリュウタロスが乱入。妹は姉が連れ去れて探すうちに良太郎と出会います。でも知らないという良太郎に彼女はぶつかったお詫びだけをして姉を探す事に。そこで不良少年に絡まれている所をモモタロスに憑依された良太郎が登場。でも彼女は実は…電王に連なるもの…電妃と呼ばれる存在でした。

新たなもの…その名は電妃（前書き）

助けてやったら次はわけわからねえやつにあっちまったよ。  
あげくはイマジンが付いてて、時の列車で育っただあ？  
わけわからねえよ！

おい、説明しろ、良太郎！！

## 新たなもの…その名は電妃

「黙って引っ込んでろ」

ボウヤ…

用があるのはその女のほうなんだからな。

なんかこの男の人、完全にイツちやってるって感じだし、  
なんかムカツク。

見下されてるっていうか、明らかに俺より下って言ってる。

あ~~~~、ムカツク。

「くそ、オイ、俺の後ろから…」

離れるんじゃないやねえ…って聞こえたような気がしたけど、そんなのど  
ーでもいいじゃん。

かばってくれたのはうれしいけどさ、こういうのって称に逢わない  
っていうか、大嫌いなんだよね、こういう男。

その男が言ってる言葉をとりあえず無視して、飛び出した。

スタートダッシュは得意なんだわ、私。

「てえ~~~~やあ~~~~!!」

おもいつきりパンチを食らわして、すぐに次の攻撃を受けられるよ  
うに準備して、足を振り上げた。

『グッ』

相手が思わずひるんだその隙に…

「くらえ〜ってんだよお！」  
必殺、かかと落し！！

ド力って音がして、かえるを踏み潰したような声が聞こえた。  
「絶対に許さないんだからあ〜〜〜！！」  
ぶつとばしちやる。

相手なんてどうでもいい、こいつ、ムカツク。

事の起こりは数時間前。

私の姉、紫闇と一緒にミルクディッパ〜ってお店でお茶をして、化粧直しで席を立てて数分。

おかしいなと想って観に行ったら帽子をかぶった男の子が姉をつれて行ってしまった。

「まちなさーいーい」

追いかけたけど見つからなくて、とりあえずミルクディッパ〜に戻ってお金を払って、外に出たら人にぶつかった。

「ごめんなさい。」

私よりも派手にぶつかってしりもちをついてしまったいかにもひ弱そうな男の子。

こりゃ当然誤るべきだろうと想って誤ると「僕の方こそ…」って誤ってくれた。

なんて素直な男の子なんだろうと想ったけど、姉を探すのが最優先

で…

「ねえ、この辺に帽子をかぶってる男の子で女の口を米俵みたいにかついた変な人みなかった？」

「帽子をかぶった男の人で女の人を担いだ人？」

僕、見てないけど…

「そう…じゃあいいわ、ありがとう」

怪我してない？

「…うん、大丈夫だと想うけど…」

「そう、本当にごめんなさいね。じゃあ急ぐからごめん」

「あ、うん。」

その男の子と再会するのは本当に数分後。

姉を探して町をさまよってた時、運悪くガラの明らかに悪そうな男に絡まれちゃって…

でも逢ったとき、なんか感じが違ったんだよね…。

ほわ…って感じがあ…？って感じに。

「…っていうかマジムカツクんだけど。あんた、鏡見てから出直しなさいって」

自分でもキレるとやばいってわかってるんだけどね…。

でもさ、なんかむかつくんだもん。

どうにでもなっちまいやがれてんだ。

っていうかちよつとぶつかつたぐらいで『慰謝料よこせ』ってどんなに柔な身体してるわけ？

まったく、いい男がそういうことというわけないだろ？

人間の身体つつうのはそんなんで怪我するほど柔に出来てないんです。

そっつい返したら突っかかってきて、相手にするのも馬鹿らしいから黙ってたら腕つかまれたんだ。

で、振りほどくのも面倒だから近づいてきたら蹴飛ばしてやろうと想っただけど…

青年がきて、その男の腕離してくれて後ろ手に庇ってくれたんだけど…

なんかね〜、どうもこいつも不良っぽいよね〜。

まあ、助けてくれただけまともかも知れないけどさ。

でも、こっこののはひ弱い女の子がされることであって、私は別にひ弱いわけじゃないから、こっこののはぶっ飛ばすに限る。

うちの家訓。

『護られるより護る女になる事！！』

っていうか突然叫んだと想ったら砂がこぼれてきてさ、そいつから変なモンが出てきた！？

っていうか化け物っしょ？

現れた怪物は邪魔とか言つて人のこと蹴飛ばしたんだよ？

女の子を。

マジ許さないんだから。

ぶっ飛ばしちやる。

絶対に許さない。

「危ないよお」

さっきのほんわかした男の子の声が聞こえたけど知ったこっちゃない。

『んな攻撃通じな…』

「通じる方法知ってるつつの!!」

化けモンがなんかうっさいこと言ってるけど、知ったこっちゃないわ。

てえ〜やあ〜。

うちの秘技中の秘技。

「空龍覇!!」

持ってたカードを敵めがけて投げつける。  
で、イメージ通りに分散。

『!?!』

「散れえーーーー!!」

拡散されたカードが相手を縦横無尽に切り刻む。  
これがうちの秘技。



なんとかかっていう奴が昔来て、これ、教えて行っただって。  
『いつか、この世界が危機に訪れたとき、君たちは電王をサポートするために生まれた一族なんだから』って。  
だから女だからって容赦しない。

これはさすがに人間相手だと殺傷能力ありすぎるからやらないけどさ。

「ねえ、こいつら、なんて名前？」

「…おい、良太郎…変われ」

俺、こいつ苦手だ

モモタロスが良太郎に選手交代して良太郎の人格が出てきた。

「えっと、彼らはイマジンっていうんだ」

「へへ、イマジンね。じゃ、異世界の化け物なんだ。」

「あなたは？」

僕は野上良太郎。

「私は紫栖諒夏。で、君が電王？」

「…一応そう呼ばれてる」

「じゃ、私はそのサポートする役目らしくてさ、えっと…電妃<sup>でんき</sup>って呼ばれる」

ハナに視線をやると彼女は驚きに言葉も出ない。  
そんなの聞いた事ない。

電王だって探すのに苦労したのに…

「オーナーからはそんなの聞いてないわ」

「僕をサポートって…」

「うちも契約者の一人だからね。」

「え〜〜、君も？」

「っと、説明は後々、まずはこいつをぶっ飛ばす。」

”おい、良太郎、変われ”

モモタロスの言葉に良太郎は身体を引き渡した。

「あ、雰囲気変わったね、あんた誰？」

「モモタロスって呼ばれてるんだよ」

「おいで、アクア」

私のイマジンも見せてあげるわ。

”じゃ、出るよお。”

諒夏から違った声が聞こえた。

淡い光りに包まれて出てきたのは青い甲冑を纏った女の騎士。

「アクアっていうのよろしくね、モモタロス。」

「ずいぶんイメージが違うじゃねえかよ。」

改めて良太郎のイメージ力の悪さに少し凹んだモモタロス。

デンライナーでもウラタロスやキンタロス、リュウタロスなどがう  
らやましそくに相手を見ていた。

「うわ〜〜いいなあ〜〜、かつこいいな〜〜」

僕もああいうのが良かったなあ〜。

良太郎ってばセンスな〜い。

ぶう〜とぶう垂れるリュウタロスに、一番ショックなのはウラタロスである。

あんなにかわいい青色の甲冑を纏った騎士。

ああいうのが本当は好みなのに…

「アクア、一気に勝負つけるわよ」

『了解^^マスター』

諒夏の言葉にアクアはにつこり笑顔を浮かべる。（表面上は変わらない）

モモタロスは状況があんまりにも突拍子過ぎて考えるのに疲れたのか、一気に剣を振り回し相手を叩き伏せていく。

「アクアボール」

水の螺旋を描き、それを相手に向けて放つ。

それは渦上に描かれて相手の動きを鈍らせる。

「今よ、モモタロス」

「おうよ！俺の必殺技パート2！」

きめポーズを決めて剣を振り下ろす。

爆発音と共に聞こえてくるはずの音はアクアの水流でかき消された。

アクアが去った後、諒夏の手には一枚のカード。

それは見まごうはすのないさっきのイメージが映し出されていた。

「ね、これがイメージンを封印する技法。うちの家系だけが出来る事。」

そっいつて微笑んだ諒夏。

呆気に撮られるハナと良太郎。

事情を聞くためにデンライナーに戻った3人。  
そこにいたのは諒夏が探していた人物。

「姉さん!!」

双子であるため見分けがつかないがどうやら気を失っているようだ。

「ちよつと、誰よ、姉さんここに連れてきたの!」

『僕だけど?』

リュウタロスが悪びれもせずになさいう。

「あなた、人攫いのイメージンなの? 封じちゃうわよ?」

『ふう〜ん。僕、強いよ、いいの?』

答えは聞かないけど。

一触即発の二人だが、諒夏の方が指を一つ鳴らすとリュウタロスの動きが止まる。

「時空を操る能力があるのはイメージンだけじゃないのよ。そこで反省してなさい」

良太郎にも乗り移れないから残念でした。

そっいうと諒夏は姉の脈を計ったりしてようやく安堵の表情を浮かべる。

「で、あなたは一体？」

「私にも良くわからないけど小さい頃両親をなくして、姉と二人で今まで生きてきたの。」

そのときにね、よく分らないんだけど、帽子をかぶった男の人が突然現れて、こういったの。

『君達には大事な使命があるんだよ。これを君たちにあげよう』

ってこのパスをくれたの。

それはデンライナーと同じパスケース。

『で、電王が現れたときには君たち電妃がサポートしてあげなくちゃいけないんだから』

がんばってくれ。

って言われたわ。

「その人の名前とかは？」

ハナに聞かれるがなにぶん小さい頃の話だ、覚えているはずがない。

「あのアクアってコ、いる？」

「あなた…誰？」

「ウラタロス。」

「イマジンね。良太郎に憑いてるの？」

「…まあね」

それより、さっきの子、出してよ。

ウラタロスの言葉に小さくアクア、と呼びかければ身体から飛び出てきた青い鎧を纏った騎士。

背中には青い羽を纏っている。

「っていつか諒夏、私のこの羽なんとかならない？」  
うっと惜しい。

「飛空タイプだから仕方ないでしょ？」

アクアというのは女性のイマジンらしい。

契約ってというのは面倒で、諒夏と一緒にいるのが楽しいんだって。

「で、ウラタロス？だっけ…私に何か用？」

「……水の力使えるんだろ？」

どうして先輩のサポートに回ったの？

僕でよかったんじゃない？

「あのね、水と水で戦ったんじゃないでしょ？」  
相対性理論って知ってる？

「馬鹿にしないでくれる？」

ウラタロスはイラッときた模様。

「炎と水は相性は最悪だけど両方とも使い方次第ではサポートできるの。」

今日みたいに動きを封じたイマジンごと浄化させられるしね」  
でも私の好みは氷付けが好きなんだけどな〜。

「ね〜、カキ氷ある？」

ナオミにそう問うアクアにナオミはにっこり笑顔で頷く。

「じゃ、ブルーハワイ一つお願いしま〜す」

諒夏は？

「…カフェオレ」

ストレートで。

姉の様子が心配なのか諒夏はそっけない。

「ってことはこのコにもイマジンが憑いてるってこと？」

「まあね〜」

ハナの言葉にアクアが楽しそうに答える。

「こいつのイマジンは発動しねえぞ？」

現にリュウタロスが攫ってきたときに何も起きなかった。

「私たちはね、その彼みたいに最近憑いたわけじゃないもの。コ  
ントロールできるのよ」

なんなら出そうか？

アクアが小さく呼び声を上げて微笑む。

「ねえ、スズ、出てきた方がいいと想うよ？」

” ええ〜、だって寝てるよ〜？ ”

勝手に出てきたらまた怒られるもん。やだあ。

声が聞こえる。

「涼夏〜、出てきていい？」

スズの事知りたいってさ。

「……姉貴が無事ならいいわ、スズ姉貴護るの手伝って」

” つよいつしよつと。 ”

ふわつと浮かんだイマジンに一同は驚きを隠せない。

漆黒の鎧を纏い、紫色の羽を背に背負う騎士。

「ふう〜やあ〜つと出てこれた」

あ〜、アクア、久しぶり〜。

感じはリュウタロスに似ているが外見から想像するに遙に大人である。

「あ、カキ氷お待ちどう様〜」

「どうも〜」

うわぁ〜いvv

うれしそうにスプーンですくって食べ始めるアクア。

それを観たスズもその前に腰掛け・・・

「僕ね〜、ブレンドコーヒっての頂戴」

「はぁ〜い」

ナオミはうれしそうに作り始める。

「ふう。スズ、一応姉貴に膝枕してあげて」

あそこ置いとくと危ないから。

「了解りようかい〜」

米俵のように担ぎあげるのかと思いきや、お姫様抱っこそのままデズライナーのいすに座る。

「っていうかうちらの電車どうしたの？」

「走ってるでしょ？時の列車なんだし」

スズの言葉にアクアが冷静に答える。

どうやらカキ氷は口に合ったらしい。

「んと、で話戻すけど、電妃っていうのは？」

良太郎が諒夏の向かい側に座り、問う。

「アクア達に聴いてよ。うちらだって知らないわよ」

「ンウ〜んふおむんふむんふむうんむ〜」

「アクアあ〜、口に物入れてしゃべらない方がいいよ」

一応女の子なんだし…

スズがそういうと一生懸命口にある氷を飲み込んで口を開く。



「電妃ってのは電王の妃で、時空の守護者の一人。まあ、詳細は分かってないけど、そういわれてる。」

デンライナーの主が電王。

で、電妃は「あれ？なんだっけ」。

アクアが首をかしげて考え出す。

「クロスライナーだよ」

いいかげん覚えなよ〜。

コーヒーが運ばれてきたスズはそれを飲みながらもアクアの言葉に言葉を足していく。

どうやらこちらの方では双子といえども違う人格のイマジンが憑いているらしい。

しかも話を聴くとどうやらトクイテンらしい。  
スズとアクアが二人に憑いたのはどうやら幼い頃…推定で4〜5歳くらいのとき。

「表に出られないからさ、でも結構鏡とかでも話できたし、時の列車で育ったようなもんだモンね」

「あ〜、でもデンライナーがあるなら要らないかな？」

クロスライナー！

アクアは力キ氷を食べ終え、うれしそうに笑っている。

スズといわれたイマジンもコーヒーを飲み終えて眠っている紫闇の髪を梳く。

「とりあえず今日は助けてくれてありがとう」

野上良太郎君。

諒夏は手を差し出した。

ご馳走様でしたとアカアも諒夏の横でナオミたちにお礼を言ってる。

「こちらこそ、あんまり助けにならなかったけど…」

ごめんね。

そういつて申し訳なさそうにしている良太郎。

「ううん、全然いいよ。ありがとね。」

もしよかったら友達になつてくれる？

諒夏の申し出に良太郎は「ぼくで良かったら」と頷いた。

「じゃ、私のメアド携帯に送るね」

赤外線送信で互いのメアドを交換する。

「暇なときにでもメールして。」

困ったときは助けに行くから。

「…あはは。」

苦笑いを浮かべる良太郎。

ホントはそれ、男の台詞だよな。とモモタロス。

「先輩：言わない方がいいよ、それ」

良太郎の運の悪さは天下一品だから。

「だな…」

わかつてるじゃねえか、亀甲。

自分たちの憑いたトクイテンである良太郎のセンスのなさは知っていたが…

あんなにも違うなんておかしいじゃないか…

と良太郎のセンスのなさを改めて思い知らされるイマジンらであった。

一方、時の列車、デンライナーから降りた三人（二人はイマジン）  
「クロスライナーの停車時間まで時間あるよ？」  
「どーする？」

腕に紫闇を抱きながらスズがアクアに合図を促す。

「涼夏はどーしたい？」

「時の運行が乱れてるみたいね」

「…へえ」

どーしてそう想う？

突然真剣な顔つきでそう告げる涼夏にスズは眉を潜める。

「だって、デンライナーって列車から降りたときの感覚がなんかひつかかるの。」

時間の狭間で空間のゆがみ…

うまく説明できないけど、そういうのを感じたのだという。

「時の運行が正常じゃないってことか」

「かもしれない。姉さんが起きたら少し聞いてみてくれる？」

スズ。

「わかってる。紫闇の方がそういうのは得意だもんね」

僕は専門外だからわかんないけど。

「自分が付いてる契約者の癖に…」

わかんないわけ？

アクアは呆れてるっていうか喧嘩を吹っかけてる感じがする。

「そういうアクアだってわかんないだろ？」

人のことはいえないじゃんか。

そう、時の運行は決して乱してはいけないもの。

でも小さな乱れでもそれがたくさんあれば乱れる事はある。  
それを直すのが私達の役目…

「ねえ、アクア、スズ…」

「…ん？」

二人がリンクして言葉を呟く。

「電妃の役目って何だろうね？」

サポートって言っても色々あるでしょ？

二人には詳しくは教えられてない。

ただ、電王のサポートをしると力をつけろってことだけ。  
封印の力もその一部にしか過ぎない。

「…僕に聞かれてもわかんないよ。」

言っただろ？僕達イマジンはそのいうことでこっちに来たわけじゃないし、

僕らが君達の契約者になったのだって本当に偶然なんだ。

「それにね、わかるのはたぶん、時空海のどつかにいる神だけよ」  
私達も神つてのに逢った事はないんだけど…

「それじゃ、その人を探せばすべてのピースが埋まるの？」  
分からないことも分かるの？

「ねえ、諒夏…世の中にはさ、知っちゃいけないことってあると思うんだよ」

知らなくていいことのほうが多いって私は思うんだけど、違う？  
アクアが諭すようにそう呟く。

次の瞬間、時のハザマから見慣れた列車が到着の音をかき鳴らし、  
降りてきた。

「さあ、おしゃべりは後々…戻ろう、二人とも。」

スズに促され、クロスライナーに戻った私達。  
これから先…何が待ち受けているんだろう？

新たなもの…その名は電妃（後書き）

んゝ難しい問題だね。

でもま、今後どうなるかが見ものかな？

ゝスズ視点ゝ（前書き）

紫闇についでるイマジン、スズ。

彼が二人に対して想ってることをつづってます

くスズ視点く

君が泣いてる気がしたんだ…

だから、僕は君の傍にいる。

ずっと…ずうーっと。

その為に契約した。

君が望むままに傍にいるために…

誰のためでもなく、自分自身のための契約。

”君を一人にしない。”

生きるときも、死ぬときも君と俺は一心同体だ。

そう、あのときから…

「スウ〜ズ？」

「……なあに？」

アクア…

自分の目の前でカキ氷を頬張るアクアにしれっとした顔を向けた僕。



こいつはアクア。  
俺と同種族のイマジンって呼ばれてるやつ。

俺たちイマジンってやつは時の狭間から飛び出して2007年に降り立った。

もちろん、過去を変えて未来を自分たちの好きなようにするために…

でも俺たちが向かったのはそうじゃなかった…  
その時代じゃ…

途中、会ったアクアと意気投合したわけでもないんだけど、波長が合うっていうのかな？

何か知らないけど、こいつとは同じ某体についてる。

同じっていったら変か…親族なんだもんない一応。

俺たちが逢ったのは過去も過去…

今、憑いてる子達が4〜5歳くらいのとき。

今でも覚えてる。

耳に残る強い声…

あの子達は覚えてない。

そう…でも覚えてない方が幸せなんだ…きっと。

「どーしたの？スズ？」

「コーヒー冷めるよ？」

「……わかってるよ。」

ちよっと考え事してただけさ。

コーヒーはアクアの言ったとおり少し冷めていた。  
でも飲めないって訳じゃないから大丈夫。

「なあ、アクア……」

「なあに？」

「あのコ達を護るんだよな……俺ら」

「……なあに？今ごろ……」

へんなの。

そういつてサクサクと音を立てながら力キ氷を頬張っていく。  
どうしてそんなに食べて平気なんだろうな？こいつは……

あのコ達が特異点だと知ったのはもう数十年前。

自分たちを従える事の出来る存在……特異点。

こういう奴らにつかまりたくないって俺たちイマジンと呼ばれる存在は想ってる。

だって、つかまったら最後、契約を完了するまで離れられないんだから。

そして今の容姿、つまり紫色の羽を生やした騎士の格好はその特異点である彼女が描いたモノ。

同じ特異点でもセンスの欠片もないやつらについての奴を知っているから、

まあ、こういう点では良かったと想ってるよ、僕は。

あの子達を護る事に異存はないけど、でも、あの子達の親の話をしたらきつと恨まれるだろうな……

っていうか、その前にどうにかされそうだし……

僕の憑いている子は名前は紫闇。

アクアの憑いている子の姉で、たった一人の身内。

ちなみにアクアの憑いている子は諒夏ってコ。

両方とも名前で分かるように女の子。

特異点で電王と呼ばれる者の妃、電妃って使命にある。

まあ、サポート役だから別に害はないけど…

僕たちが乗ってるこの列車はクロスライナー。

デンライナーが電王の列車で、クロスライナーは電妃の列車。

何で分かれてるのかって？

僕に聞かれても困るね。決めたのは誰だか知らないんだから…

「アクア…」

「なあに？」

「あのコ達にいつか本当のこと話さなきゃいけないんだよね」

「……………そうね」

小さくそう呟いたアクア。

そう、大きな隠し事してるんだよ、僕ら。

でも逸れを言うわけにはいかないんだ。

過去が変わっても未来が変わってもそんなの関係ないけど…

デモ…

君たちが大事だから…

だから…

教えてあげられないんだ。

「アクア…」 「スズ…」

二人の声が聞こえる。

「アクア、お呼びだ」

「待ってました〜」

うれしそうに時空を越えて彼女たちのもとへ駆けつける。  
きつと待ちくたびれてるに違いない。

「今行くよ」

待ってて…紫閻。

「お待たせ、諒夏」

「遅い！」

「来たよ、紫闇」

「遅いわよ、スズ」

そういわれても早く来たつもりなんだけどね。これでも。

「あんな雑魚…すぐ倒すよ」

「アクア…焦らない」

「スズは冷静になりすぎ」

もう少しファイティングは熱くならなくちゃ。

つまらないでしょ？

僕は苦笑いを浮かべた。

僕とアクアは正反対。

火と水、闇と光…そういう感じ。

「さあ、電妃…」

お手をどうぞ。

紫闇の手をとり、僕が主導権を握る。

メイクアップ  
「変身」

紫色のボディで羽の生えた堕天使の出来上がり。

アクアの方も水色の羽の生えた堕天使。

アクアは錫上。僕はクナイ。

アクアは飛行タイプ。

だけど僕はすばやさでは負けるつもりない。

「さつさと片すよ、アクア」

「もっちろん」

そう、さつさと切り上げて今日は眠ろう。

嫌な事思い出しちゃったし…

「「封印!!」」

二つの声が聞こえたとき、僕は…紫闇から離れ、クロスライナーの  
中に戻った。

いつか、僕とアクアもあやって封印されていくのかな？

「ねえ、アクア…」

「ん？」

いつか僕達もあやって封印されるのかな？

そう聴けばアクアは首をかしげて「わかんない」と言った。

「諒夏と紫闇がそれを望むとは現時点では考えられないし…」

あ、ブルーハワイ一つ。

「あ、僕、コーヒーちょうだい」

列車の添乗員にそういうと二つ返事でOKと出た。

「ふう〜、今日は疲れた〜」

「なよってるのにね〜」

意外にしぶとかったわね〜。

紫闇と諒夏が戻ってきたみたいだ。

「おつかえり〜」

紫闇、諒夏

アクアがにつこり微笑んで手を振ってる。

「アクアはそれ、好きね〜」

運ばれてきたかき氷に呆れ気味の紫闇。

毎度毎度食べてるんだから、確かに見慣れた光景だろうけど…

「これが好きなのよ、しょうがないでしょ？」

ならスズだってそうじゃない。

「…僕？」

僕はコーヒーが好きなだけだよ。

「一緒じゃん。」

「クスクス…」

僕とアクアのこういうやり取りに最後は二人が笑うんだ。

そつ、こういう時間が僕達には楽しいんだ。

昔から容姿は変わっても中身はある程度変わっても、こつやって変わらないでいてくれる…

それが…今はうれしい。

「で、今日はどの過去へ？」

「2001年だね、このイマジンと関係してた契約者が契約したのは」

「じゃ、いきますか」

「だね。」

そういつて飛び出していく二人を僕はここから見守っている。

何かあったら駆けつけるから…

だから、僕達を呼んでね。

ね、二人とも…

いつか君たちが僕達を必要としなくなる…その日まで…

僕達は君たちを…

僕達自身の意思で…



護  
る  
か  
ら  
…

ゝスズ視点ゝ（後書き）

スズとアクアというオリジナルイマジンがいますけど、二人はどうやって紫間と涼夏に出会ったのか……  
なぜ二人を護る結果になったのかを書きたいなと想って書きました。  
オリジナル要素多くてごめんなさい。

歪み…そして電妃（前書き）

時空の中にいる王の指示でやってきた電妃。  
歪み…そして大人の桜井悠斗の目的とは？

## 歪み…そして電妃

『電妃？聴いた事ないな』

『デネブが知らないって言うんだから俺も知るはずねえだろ？』

悠斗に聴いてみたけど、やっぱり知らないって。

当然だよ、ハナさんだって知らないって言うてたんだから。

『そいつが電王の妃っていうんだつたら聞いてみたらいいんじゃない？』

何か知ってるかもしれないでしょ？彼だったら…

ハナさんに言われて、悠斗にゼロライナーまで聴きに來ただけど…  
ほら、悠斗なら何か知ってるんじゃないかって。

あの一件以来、諒夏さんと紫闇さんはミルクディッパーには來なくて、

心配はしてたんだけど、（メールも來なかったし…）でも最近メールが來たんだ。

内容がちょっとアレだったけど…

紫闇さんとは最初、陰悪なムードだったんだ。

まあ、非は僕達（特にリュウタロス）に合ったから仕方ないといえ  
ば仕方ないんだけどさ。

なんとか僕達は友達になった。

新しい道が発見されて、その調査もかねてこうして尋ねてきたんだ  
けど…

「そっか…」

『お役に立てずに、ごめんね、良太郎君』

デネブが申し訳なさそうに俯いた。

「うっん、でね、悠斗、その人達がね、悠斗に逢いたいって言うんだけど…」

「どうかな？」

逢ってももらえないかな？

『何で俺が逢わなくちゃいけないんだ？』

それに、俺には関係ない話だろ？

「いや、それが、どうしても悠斗に話たいことがあるって」  
涼夏さんが。

『ふう〜ん、どうしてももってんなら逢ってやらない事もない』

「ほんとに　じゃ、早速メールしてみるよ」

『…お前…メールとかしてんの？』

メル友とか言うやつか？

「そういう感じ…かな。」

『電妃か…何だか、いやそうかな。女の子ってどうなのが好きだと想う？』

悠斗。

『俺に聞くな!!』

デネブ。

悠斗の機嫌は最降下。

——女なんてあいつだけで十分だ。

カードを無くした悠斗はもう変身できない。

なのに、どうして俺はここに存在してるんだろっ…  
悠斗はかげながら見守っていくことに決めたのに、自身の決意が揺らぎそうになるのを必死に耐えていた。

数時間後：ゼロノス、デンライナーの近くに一台の列車が到着。  
クロスライナーである。

外見はパールホワイトで、細身、そして、前方がデンライナーと同じようなつくりになっている。

そのドアが開き、出てきたのは一匹のイマジン。

「アクアさん。」

『こんにちわ、良太郎さん』

につこり笑顔のアクアにデネブが戸惑う。

「良太郎くん、あの子は誰ですか？」

「あ、えっと、諒夏さんについてるイマジンで、アクアさんだよ」  
デネブ。

「始めまして、諒夏についてるイマジンのアクアです。」

「あ、これはご丁寧にも。デネブです」

互いに頭を下げて挨拶しあう。

そんな姿に思わず悠斗が笑みを浮かべる。

良太郎も釣られて笑う。

「で、肝心の諒夏さんは？」

「あ、諒夏ね、待ってて、もうすぐ来るから。」

列車内に入って「早く、早く」と急かしているのが分かる。  
何かやっているようで「待って〜」という声が聞こえる。

「そっいえば、紫闇さんは？」

「んと別件でスズと出かけてるよ」

「別件？」

「ん。」

にこつと笑顔で言われるのでそれに攀られて笑みを浮かべる良太郎。  
ドタドタドタという音がして、出てきた諒夏は汗を流しながら荒く息をついた。

「ごめつ、りょうたる…待たして」

「だっ大丈夫？」

額の汗が凄かったため、ハンカチを差し出す良太郎。

「あ、ありがと。」

素直に受け取り、アクアはジュースを差し出す。

「サンキュ、アクア」

「どういたしまして。」

『で、お前が電妃か？』

悠斗の静かな声が響く。

『電妃の一人ですけどね、正確には』

苦笑いを浮かべる中、アクアは良太郎をクロスライナーに案内する  
といって乗せた。

それと同時に諒夏がクロスライナーを降りる。

ドアが閉まり、時空の間と呼ばれる砂の地帯には悠斗、そしてデネ  
ブと諒夏だけが残った。

『私は諒夏、電妃で時を知るもの』

「時を…知る？」

デネブがそう呟くと諒夏はさっきまでの笑顔とは違ってまじめな表情になる。

『ミルクディッパーにいる野上愛理、そしてその婚約者の桜井悠斗。』

そういわれ、悠斗の表情が厳しくなる。

『そして、電王として選ばれた野上良太郎。すべてのピースが埋まり、そして、時空が歪み始めた』

諒夏は淡々と語る。

ゆがみの原因は桜井悠斗自身だと。

「じゃあ、俺が歪みだと？」

「そんな――！絶対歪みなんて――」

デネブもそれには猛反発。

『私が言ってるのは野上良太郎の知っている桜井さんの方。』

「……」

『でも、あなたもそろそろ決断のときが来てる』

彼は未来を変えようとしてる。

諒夏の言葉に悠斗は眉を寄せた。

『だから、私はその手助けをするために今日良太郎に連れてきてもらったの』

「ちよつと待て！決断とか手助けとか、一体何のことだ！？」

『わかってるはずだよ、桜井さんが来たでしょ？』

ゼロノスになるためのカードを持って。

「――！！！！！！？」

なぜ知ってるんだ……？

デネブが驚きに固まる。

『あなたも桜井さんでしょ？』

私たち電妃は補助するのが役目……

そう言つて一枚のカードを取り出す。

それはまぎれもなくゼロノスのカードだった。

『聞いた事あるでしょ？時空海の中にいる王の話。』



「…ああ」

「デネブ…？」

『王がおっしゃったの。新しい路線が出来たとき、これを彼に渡しなさいって』

「まさか…これがあの路線の？」

路線にいけるカードなのか？

悠斗の言葉に諒夏は首を横に振り、

『違うよ。でもあなたのカード一枚消費しなくてもゼロノスになれる。』

忘れたくない、忘れられたくないっていう気持ちは分かるから…

『だから、一枚だけ、特別なカードなの』

たった一枚だけど…

申し訳なさそうな諒夏にデネブは深く頭を下げた。

「ありがとう…ありがとう…」

涙を流しながらデネブはそう呟き続けた。

『一人だなんて想わないで…私たちもいる。良太郎達だっているんだから』

何かあったら頼って来て。

『諒夏…』

ドアが開き、出てきたアクアはうれしそうにぴよんぴよん跳ねて諒夏の傍に寄った。

その後ろでドアにもたれかかるように座り込む良太郎。

どうやらアクアの遊び相手にされたようだ。

『アクア。駄目でしょ、良太郎で遊んだら』

『案内しただけだよ…』

ね…。とリュウタロス並の笑顔を向けて良太郎に同意を求める。

「…だっ大丈夫だから。」

『そんなにっつらそうな顔したってわかるって。』

ごめんね、良太郎。

「でもゼロノスともデンライナーとも違う創りなんだね。」  
驚いちゃった。

『あはは……』

「おい、良太郎、イマジンだ。」

モモタロスの声が良太郎に聞こえた。

「え？イマジン？」

『ああ、もうすぐ出発すんぞ』  
急げ。

「わかったよ。」

そついうと良太郎は立ち上がった。

「じゃあ、またね、諒夏さん」

『またね……』

手を振る諒夏。

乗車するとすぐに動き出すデンライナー。

『じゃあ私たちも行くな。』

今日はありがとう、桜井君。

手を差し出す。

「……」

スタスタとそのままゼロライナーに向かって歩き出す悠斗。

『素直じゃないな……』

「あの、ありがとうございます」

デネブはちゃんとお礼を言っ頭を下げた。

『デネブさん、もし何かあったら私を呼んで。これ電話番号ね』

紙を一枚渡すと先を歩いていた悠斗に呼ばれ、そそくさと立ち去る

デネブ。

残されたアクアと諒夏はゼロライナーの発車を見送った。

『お人よしだねー諒夏って』

『かなー？』

『まあね、あ、お客さん来てるよー』

早く戻ろう。

アクアに促され、クロスライナーに戻る諒夏。

『特別室に要るよ』

『ここ、良太郎には？』

『見せてない』

『そ、ありがと。紫間から連絡来たら教えて』

『りよおかーい』

アクアと食堂車で別れ、諒夏は一つの扉をノックする。

そのプレートには『特別室』と書かれていた。

「どうぞ」

『邪魔します』

そのドアをあけた瞬間見えたのは…帽子を深く被った悠斗。  
悠斗に笑いかける諒夏。

そのドアが静かに閉まる。

それと同時にクロスライナーが出発。

時空を越えた。

『やっぱり貴方でしたか…』

「……彼は受け取るかな…これを」

そこにいたのは桜井悠斗。

良太郎が探し続けている大人の彼。

そして、辛き運命を背負った一人の青年。  
時空海の王が言っていた、ゆがみを作ったもの。  
そして、それは過去、現在未来を左右する特別な路線。

『アレの正体がかめ次第、ご連絡差し上げますわ』  
確実に貴方のやろうとしてる事は成就し始めてます。

「……………そうですか」

『良太郎君の記憶は消えません』

そして、あなたの婚約者の愛理さんの事も。

その為に私たち電妃はあるのですから…

「…良太郎君が危ない…イマジン徐徐に強くなってきた。」  
これを…

悠斗が受け取らなかったカードケース。

それを握り締め、大人の悠斗は苦い顔をした。

『急ぎましょう、今、良太郎君が向かった場所にこちらも向かっています』

ゼロノスにも連絡を入れさせますから…

「すまない」

特別室のドアをあけて出て行こうとした諒夏に大人の桜井がただ一言告げた。

『お気になさらずに…』

そういつてドアを閉めた諒夏。

廊下でアクアが電話をしていて、そして諒夏を見つけるとすぐに電話を切った。

「諒夏、電話完了してるよ」

「ありがと、アクア」

「紫闇とスズも来るって」

どーする？

「…姉さんには引き続きあの路線のこと、そして確実に変化してきているのの調査を続けてもらって」

こっちは今、やらなきゃいけないことがあるもの。

「りよおか〜いvvv」

ピッポッパ…

「あ、スズ〜〜？」

アクアが電話している間に車両の窓から外を見つめる諒夏。

――歪みを正す事はしない。

だって、それは確実にいい方向にいくのだから…

私たちのすべき事は…電王である良太郎の笑顔の為に動く事。  
存在すべてを掛けて、その方の願いをかなえること…

それが…電妃…

――そして、歪みの原因は私達にもあるのだから…

諒夏は一人、走っていく電車の車窓から外を見ていた。

そして、良太郎が戦闘している頃、到着したゼロノスの前に大人の桜井を降ろし、車窓から見守る。

カードを渡し終えたのか、桜井はクロスライナーに戻ってきた。

「では、次の駅までお願いするよ」

『了解です。』

涼夏がそついうと大人の桜井は特別室と書かれた部屋へと入っていた。

歪み…そして電妃（後書き）

助けるんだけど、それは良太郎に笑顔でいて欲しいから…  
だから存在なんて…関係ないんだよ。  
ただ、笑っていて欲しいから

## 確実に変わる未来（前書き）

テレビシリーズ（2007/10/14）の放送直後に書いてしまいました。

どうなるんでしょうか？



## 確実に変わる未来

「やっぱり…なんらかの力が働いてるとしか思えない」

紫闇はそう呟いた。

近くにいたスズも辺りを巡回していたのか、空から紫闇の元へ舞い降りる。

『みたいだね、ここ、捻じ曲がってる。』

しかも、無理やりね。

新たに出来た路線。

その先に何が待ち受けているのかを調査していた紫闇達だったが、路線の入り口までスズが確認しに行き、紫闇は一人、線路のしたにある窪みから

時間の流れを読み取っていたのである。

そして、行き着いた結論は…

「もお時間がないみたいね」

『…だね』

それに、なんか嫌な気配もするし…

「一度クロスライナーに戻ろう」

諒夏に連絡とって。

『了解。』

「姉さん！！良太郎に憑いてるリュウタが暴走してる」

クロスライナーに入ってきたと同時に諒夏がマシンガンのようにしゃべりだした。

どうやら時空の中にステーションが出来ていたらしい。  
そしてクロスライナーもそこに入ろうとした瞬間、飛び出してきた  
列車に驚き、後を追う事にしたという。

「…あの男の所為？」

「みたいだよ。」

『あの男って誰？』

アクアがスズに呟く。

『さあ…』

でも、目の前走ってるのデンライナーじゃない？

「うっそお〜」

爆走しているデンライナー。

「だって…あれってオーナーがちゃんと動かしてる…はず」

これ以上走り始めたら暴走して壊れちゃうよ！！

「涼夏！！」

「了解！！」

「「変身！！」」

ノーマルモードではなく、スズ達が憑いた状態の二人。

「アクア、王に許可を…」

『りょおか〜い』

「スズ、あのデンライナーを止めるわよ」

『了解。』

適当な返事で機関室へと向かうスズ。

電車の中から王と時空王と電話をするアクア。

「時の流れを壊すもの…カイ…」

それが奴の名前…

『……………止めてもらう』

「わかりました。では、キング…」

『ターミナルにはこちらから連絡を入れましょう』  
がんばってください。

これから。

中年の男の声でそう呟かれ、アクアは頭を下げつつコキを置いた。

「起動開始。」

姉さん…

「了解。良太郎の方は涼夏お願い。」

私、デンライナー止めるのに精一杯なもの。

「壊れたら弁償してもらわなくちゃ！」

「だよね〜」

アクア、いつくよ〜。

『おー！！』

アクアはうれしそうにその場から姿を消した。

良太郎に着いたリュウタロスの前に現れたゼロノス。  
それと戦う黄色イマジン。

そして、カイと呼ばれる人物。

「！！！？」

二人の前に空から現れる蒼い光。

『こんなのに苦戦してんじゃまだまだじゃない？』

うおらっ！！

アクアのキックが炸裂。

宙を裂き、舞うようなステップでイマジンにダメージを与えていく。

「てめえ……」

悠斗の言葉にアクアはにっこりと笑う。

『とりあえずこっち先片付けるよ……』

「上等……」

悠斗とアクアの連携プレイでイマジンに光の渦へと化する。

おや、あなたが電妃……ですか？

カイと想われる青年がアクアを見て口元を上げる。

『そおだけど？あんた、誰？』

諒夏が言っただけ、あんた敵？

そしてその隣にいたリュウタロスに視線をやった。

『こおいうの、スズの役目なんだけどさ、あんた……最低』

あんたの好きな電車、こんなにして、そして愛理さんも傷つけた。

良太郎にもマイナス。

あんた、最低。

アクアの冷たい声がリュウタロスに告げられる。

リュウタロスは黙ったまま…

それが自分のしでかしたことだし、やったらいけないことだった。わかってた。

でも…

ーボクだって…お姉ちゃんに甘えたかったのに…

悠斗と話してるときの愛理さんの表情に嫉妬した。

悠斗にしかあんな笑顔見せない。

弟の良太郎にすら…

それが悲しかった…

「そっか、ボク…悲しかったんだ」

今ごろ気づいちゃった。

座り込むリュウタロスにカイは足を振り上げた。

『っていうか、あんた、邪魔なんだよね!!』

アクアが諒夏から離れ、アクアとして整形された。

そして、カイの足を掴むとそのまま放り投げた。

『あんた、最低。イマジンのボスにでもなったつもり?』

それに、今日はあんたのおかげで最低最悪の日になっちゃったんだけど、

この責任、どう取ってくれるの?

冷たい視線でカイと呼ばれた青年を見やるアクア。

電妃の特性…ですか。

だが、彼は冷静にそう呟く。

『うちらとこと構えるつもりなら…容赦しないよ。』

それに、あんたの目的、潰すって今ならいえる。

「アクア…」

リュウタロスの言葉にアクアは後ろ手を差し出す。

「あんた、負けるつもり？」

答えは？

「聞いてないけどね」

よおと。

足で地面をけり、その反動で起き上がる。

「今回だけはありがと」

「ほいつ。」

握らせたのはパスケース。

「これえ」

「うちのだけど、貸したあげる」

一度しか使えないから気をつけてね。

「ありがと」

変身。

ガンフォームへと変身したリュウタロス。

その後ろから見守るゼロノスと諒夏。

「おい、あれはなんなんだ!!」

説明しろ。

「詳しい事は分からないんだけど、たぶん、ゼロノスに入ってるパスは時空を永遠にループしてさまよう

恐ろしいカードだと想うの」

推測でしかないんだけど…

「んなの、どーすんだよ!!」

「大丈夫、今もう一人の電妃がこちらの列車で後を追ってる。絶対止めて見せるから。安心して。」

悠斗は信じられないという顔をして変身モードを解こうとした。

「あ、まだ変身してて、たぶんもう一体…」

来ると想うから。

『それも電妃の特性ってやつか？』

「しいて言うならそうかもね。詳しい事なんて誰にも分からない。ね、少年の桜井悠斗君」

『…何知ってやがる？』

「しいて言うなら…貴方の知らないことまで…かな」  
含み笑いをする諒夏を見つめるゼロノス。

イキキキ…

地面から声が聞こえる。

さっきのイマジンのイメージが暴走しているようだ。

『デネブ…』

悠斗が呟く。

でもゼロライナーがない以上攻撃は下からとなるから、苦戦も必須だ。

君にこいつは止められないでしょ？

ゼロノス…いや、桜井悠斗…

うれしそうにカイと呼ばれた青年は笑う。

だが、それは諒夏によって遮られることになる。

「うつさいよ、ボケ」

諒夏は一つそう呟いてポケットからカードを出した。

「在るべき場所に帰りなさい、馬鹿イマジン」

カードを地面に置くとそれは砂となり、辺り一面を埋め尽くす。

「もと在るべき場所、もとある時代、我ら電妃の名において、かの者を封じん」

戻れ、わが元に。

「今よ、ゼロノス」

『なんだかよくわかんないけど…』

行くぞ、デネブ。

『了解だ』

フルチャージ…

弓型になったのを怪物めがけて発車。

直撃した弓の先にカードが出現。

カードが現れたと思えば、先ほどの声が小さくなり、何も書かれていないカードにさっきのイマジンが映し出されていた。

…それが電妃の力…ですか

カイと呼ばれた青年はリュウタロスをうまく撒き、そこにたたずんでいた。

「そうよ、あんたの策略なんてキングはお見通してわけ」

時空の管理者である者の知略を甘く見ないでよね。

あの男の指示…ですか



「未来は変わるもの。ちょっとした変化でも変わってしまう。だから人は面白い」

諒夏の言葉にカイと呼ばれた青年は目を細める。

ボクの計画潰してくれるんだって？笑わせないでくれる？  
ねえ、ボク怒ってるでしょ？  
そいつって目を細めたまま低い声でそう呟く。

『なあにごちゃごちゃ言ってるの？あんたは弱い、負けるの、分かる？』

諒夏馬鹿にすると許さないよ。

アクアも珍しくやる気満々のようだ。

『それにい、時空海の王に掛かったら、あんたら死ぬよ？』  
あの人のこと知らないわけじゃないでしょ？

時空王…そう聞いてカイと呼ばれた青年の目つきが微妙に変わる。

あの方が…そうですか。

今日は部が悪い…出直しましょ。

失礼。

そついうと淡い光に包まれて影も形もなくなっていった。

「アクア、クロスライナーとモモタロスたちが心配だね、戻りましよう。」

諒夏の言葉にアクアは首をかしげた。

「ねえ、あんた、リュウタロスだっけ？」

「…そおだけど？」

変身をといてアクアにパステスを返した。

「良太郎から出たら形維持できないの？」

不思議そうなアクア。

「わかんないけど、大丈夫だと想う」

「んじゃ、後始末するんだから付き合つて。」

あんたがやったの手伝つてあげるんだから、早く。

急げ。

急かされて良太郎から離れるリュウタ。

それとは反対に眠りこける良太郎をなんとか悠斗が抱きとめた。

「おい、野上…」

「……大丈夫、気を失ってるだけだわ」  
脈を診て、ホッと一息ついた諒夏。

「じゃあ諒夏…ステーションでまたね〜」

ほら、行くよ、リュウタロス。

「……………」

アクアの翼が広がり、リュウタロスを持ち上げて空へと飛び立った。

「で？俺らはどーすんだよ」

ここで…

良太郎を支えながら座り込む悠斗。

「もうすぐ姉が来ます。」

『姉?』

「言ってますでしたか? 私に姉がいること...? 双子なんですよ」  
だから同じ顔ですけど...

『そいつがきて何か状況が変わるのか?』

「変わりますよ。桜井悠斗さん。」

『??』

フルネームで言われ、悠斗は少し怪訝そうな顔をしていた。

「今、姉が何処にいると想いますか?」

『んあの俺が知るわけないだろう?』

「ゼロライナーとデンライナー...」

それだけ言われ、察したのか悠斗、そしてデネブ。

変身をといた悠斗のカードは消えなかった。

『カードが...』

『消えてない!!』

「でしょね...運命さだめは変わる...」

空を見上げて諒夏が呟く。

『おい、どういうことだ!?』

『落ち着いて...悠斗...』

『デネブ...お前、野上見てろ』

答えろ!!

諒夏に掴みかかる悠斗。

「運命は変わる。新しい路線がその証拠。大人の桜井悠斗は自らの意思の強さでそれを変えて見せた」

そしてこれからも運命は変わり続ける。

それを見届けて...桜井悠斗。

『お前…何を知ってる…?』

「これから先は何も…でも新たな道へ入るためのカードを探さなきゃ…」

貴方の記憶は消させない…これ以上。

諒夏の言葉に悠斗は眉間に皺を寄せた。

『あの…これって…もしかしてこの間頂いた…?』

デネブの言葉に首を横に振る。

「違うわ。私があげたカードはそれじゃない」

『…過去が変わってるって言うのか?』

「ええ、確実に…」

変わる過去…そして、それが未来…現在へと変わる。

何がどう変わるか分からない…でも、分かっている事はただ一つ…

電王が、そして私達の運命は今までであった未来とは違うということだけ…

## 確実に変わる未来（後書き）

新たな敵：カイ。

イマジンにどう関わってるのか分からない。

不安と期待を胸に：電妃は空を見上げた。

片付けは私たちの役目じゃない（前書き）

謎の青年、カイ。

彼は何を知ってるのか？

その後始末…なんで私がしなきゃいけないの？

片付けは私たちの役目じゃない

まったく、どうしていつつもあいつらの始末しなくちゃいけないのよ。  
デンライナーを追いかけてクロスライナーを走らす紫闇。

『仕方ないんじゃない？電王も必死にがんばってんだしさ』  
あっけらかんと言ってくれる…

「そう想うならスズ、あれ止めてきてよ…」  
厄介な事にデンライナーの後ろにはゼロライナーがいて、連結して  
る。

たぶん、動いてるのはゼロライナーだ。

『主はゼロライナーか…』

一度発進したらやっかいだもんね。  
あれ。

そう、桜井悠斗（大人）にあれを渡したのだって私達だった。

ゼロライナー…一度消えたはずの列車。

過去から未来…現在を行き来するもう一つの異端列車。

すべての始まりと終わりを意味する列車。

王の命令で探し当てて消える前の列車をこっちに引っ張ってきた。  
そして、大人の桜井悠斗に貸し与え、そのゆがみを作る手伝いをし  
た。

それもすべて自分たちの運命を変えるため…

最初は嫌だった。

どうして私たちがこんな事をしなくてはいけないのかと。  
イマジン？どうだっていい…

アクアとスズもイマジンだけど、彼らは小さい頃から知ってるから…  
イマジンといわれてもあんまり感じない。  
だって家族みたいなものだモノ。

私と諒夏大切な二人の家族。

「でえ？どうするの…あれ止めるの」

『とにかく、ゼロライナーに近づかないと駄目だろうね。』

コントロール室に行つてバイクからキーを抜かないと…

「方法は？」

『今のところ…見つからない』

走つた列車は急には止められないから…

攻撃して止めるか…

でもそれだと壊れないか？デンライナーとゼロライナー。

無傷っていうのは難しいだろうけど…でも無傷に近い状態じゃないと…

「キングライナー」

『どうしたの？紫闇』

スズが奇妙な言葉を呟いた紫闇に驚く。



「急にぱつと浮かんだの」

王の住まう場所…そしてデンライナーのあるべき姿…

王…つまり電王…のこと。

キングライナー…聞いた事ない。

「名前は違つかも…でも新たな路線を見てからこう…今までと違うような感じがするの」

わかんない…

『とにかく、あの先の崖からどっかへ飛ばれたら厄介だ。一気に止めよう』

「了解。」

変だな…私…

なんかおかしい…

どうしてだろう…

胸騒ぎがする…

今までと違うこと…

何かが…始まる…予感がする。

『紫閨、一気に行くよ』

「OK!」

無傷で還せなくてごめんね。

良太郎君。

片付けは私たちの役目じゃない（後書き）

これ以上何も起こらないといいですね。  
テレビシリーズをみて書いてます。  
雑ですみません。

悲しい未来なんていらなにきまってるもん（前書き）

謎の青年、カイ。

彼と出会ってからアクアはずっと想っていたことをふとしたきっかけに口に出してしまう。

ずっと一緒にいたのに…

一緒にいたいのにと。

悲しい未来なんていらなにきまってるもん

許してくれないよね…

涼夏も紫闇もさ。

きつと…本当のことをいったら…

うちらだってイマジンだもん。

許してなんてくれないよ…

でも、嫌われたくない。

涼夏に…

あの子だけには嫌われたく…ないもん。

『…どしたの？』

『リュウタロスはいいいね。良太郎とあんなに仲良しでさ』

リュウタロスを引つ張っていったアクアが突然泣き出しそうな顔になつてリュウタロスは心配そうに顔を見つめた。

『そお？仲いいとかじゃないと想うけど？』

『つていうかそっちは一人だからいいじゃん。うちは四人もついてるんだよ？』

『良太郎の運のなさも最悪だし、』

ボクなんていつもデンライナーで遊んでるんだよ。

ほとんど戦ってるのはモモだもん。

つまんないよ、ホント。

『でも、あんなにあんたのこと考えてくれてるじゃん』  
さつき、カイって人に馬鹿にされてたあんたを庇ってくれたじゃない。

アクアは微笑んだ。

リュウタロスは不思議そうな顔をしてアクアの顔を覗き込んだ。

『何いってんの？あんたの方が心配してくれてるだろ？』

『……………』

当然でしょ？

ふとした瞬間、アクアの答えに間があった。

リュウタロスはそれに違和感を感じながらもアクアと共にデンライナーの所に

アクア自身が連れてきたリュウタロスとともに時空の中を超えた。  
そして、出会ったデンライナーはキングライナーに入り、なんとか急停車していた。

『スズ〜〜〜』

『やあ、アクア。』

『リュウタロス、ほら、戻りなよ』

行くんでしょ？

もう大丈夫だよな？

アクアの言葉にリュウタロスは俯きながら頷いた。

『まったねえ〜〜〜v v』

笑顔を浮かべるアクアにリュウタロスはにっこりと笑って手を振った。

「アクア…諒夏は？」

『うん、ゼロノスと一緒に。』

どうせゼロライナーも戻すから丁度いいかと思って。

置いてきた^^

笑顔でそういうアクアに紫闇はただため息をついてキングライナーからゼロノスを引き取る手はずを整えにエントランスへ向かった。

『アクア?』

どうかした?

スズにはなんでもわかつちゃうんだね。

『ねえ、スズ: カイツて男がうちらイマジンを自在に操れる能力持つてるんだけどさ』

過去も未来も変わって…諒夏達が私達のこと知ったらさ…

軽蔑されちゃうかな?

アクアの言葉にならない言葉にスズは黙り込む。

”二人にだけは知られなくなかったのにな…”

アクアはただ空を仰ぐ。

クロスライナーの窓から見える時空の中。

そして、ステーションと呼ばれた場所の風景。

『特異点: そして、彼女たちの素性が…』

そいつは何処まで知ってるのかな?

スズの言葉にアクアは首をかしげる。

『少なくとも時空王のことはご存知みたいよ』

『: じゃ、ある程度は敵さんもご存知って事?』

『リュウタを良太郎に憑かせたのもそいつみたいだし…』

『: ふうん。ある程度のイマジンはあいつの味方ってわけ?』

『だらうね。』

これ以上…二人に何かをさせたいわけじゃない。  
誰かを傷つけたくもない。

でも、これは契約。

私達とあの方たちの契約。

” 悲しい未来はもういない。 ”

” 悲しい過去ももういない… ”

未来が変われば私たちも変わる。

生まれなないかもしれない…出会えないかもしれない。

消えるかもしれない…

消えないかも…しれない。

でもそれはありえない。

予感がするんだ…

きつとあの新しい路線の先には私たちはいないんだって。

『 ねえ、スズ… 』

『 ……今を楽しむ… 』

『 え？ 』

『 いつもの君ならそういうんじゃない？ 』

アクア…

スズに言われて苦笑い。



そっだよね、私らしくないよね？悩むなんて。

「アクア、スズ、諒夏達迎えに行くわよ。」  
アクア、諒夏に伝えて。

機関室から聞こえる紫闇の声に『りょおか』と叫ぶ。  
『アクア…』

『大丈夫だよ もう考えるのやめたから』  
そっいうのはスズの役目だもんね。

私はおっきらくだも〜んvv

精一杯の笑顔を作って食堂車へ向かうアクア。

ドアが閉まって食堂車についた瞬間、座り込む。

” 諒夏や紫闇と逢えないなんて未来… いらない…”

ずっと一緒にいたのに… 忘れられるなんて嫌だ。  
でも…

それが二人の幸せなら…  
それで諒夏と紫闇の笑顔がずっと続くなら…

うちらイマジンなんていないほうがいいんだ。

未来が変わって… 逢えなくなっても…

全然… 辛く…

涙が頬を伝う。

拭っても拭っても零れ落ちてくる涙に… アクアはただ、座り込んで

その涙を拭っていた。

悲しい未来なんていらなにきまってるもん（後書き）

過去も未来も、運命さえも変えてしまふ自分達の存在。

その事に悩まされてるイマジンのもう一人を書いてみました。

お気楽そうに見えても悩んでるんです。アクアだって。

でも役割ってあるじゃないですか、良太郎の所も。

だから二人の所もきつとあるんだろぅな~~~~って。

アクアはちなみにメンドくさいからスズ考えてっていうタイプだと  
想ったんです。

## 変わり行く運命（前書き）

カイという青年の登場で未来が変わってしまう。  
それを知ってか時空王と呼ばれる人物から呼び出しをくう二人。

## 変わり行く運命

時空の王から呼び出しが来たのはもう何度目だろうか…

いつもは姉が行くのに…今回は私達二人とも呼ばれた。  
スズやアクアは来てはいけないとも。

それも珍しい事だったし、何より…

嫌な予感がしたんだ。

『貴方たちを呼んだのは他でもありません』  
時空王が私達に唐突にそう呟いた。

『新たな路線が出来て、未来が少しずつではありますが変わりが  
ていますね』

そんなの分かりきった事なのに…  
その先がどうなるのかも、きつと時空王…あなたならご存知のはず…  
私たちはその先の言葉を聞けずにただ、時空王からの話の続きを待  
つしか方法はなかった。

『あなた方を呼んだのは他でもありません』  
貴方たちの存在に関する事を告げなければいけないんですからね。  
そう呟いたその先の言葉に私たちは目を見開いた。

どこかでもしかしたら…と想っていた。  
でも実際にそういわれてしまえば、黙る事しか出来ず…

” 未来が変われば君達は存在しないかもしれない。”

時空王の言葉に衝撃を受けた。

『酷な事をいうようですがね、』

現にあなたたちがいた未来は消滅してしまいましたから。

時空王は二人にそう告げた。

そう、なんとなくわかってはいた。

良太郎と出会って、ゼロノスやデンライナーの人達に会って。

私達の未来に彼等はいないかもしれないし、私達は彼等の未来にいないかもって。

それが現実みをおびたというだけ。

でもなんでだろう、

悲しいという気持ちと、寂しいって気持ちの方が大きい。

忘れられてもいいなんていわない。

『ですが、まだ未来は決まっています。これからどうするかは貴方たち次第なのですからね』

ゼロライナーが主を求めて暴走しかけてます。

申し訳ありませんが、回収しつつその主を探してもらえませんかね。

「分かりました…」

「…はい」

『では、頼みましたよ』

二人とも。

失礼しますと時空王との会談を終え、ステーションに來るとアクア

とスズが桜井侑斗を捕まえていた。

『あ、おつかえり』

につこり笑顔でぴょんぴょん跳ねながらアクアが言う。

『大丈夫？紫闇：？』

なんか表情くらいよ？

『…大丈夫よ』

スズってば心配性ね。

そういう紫闇はいつもの笑顔だった。

いや、笑顔を作らざるを得なかったというのが正解だろうか…

「おい、こいつらなんとかしろ！！」

慌てふためく侑斗に諒夏がアクア達に拘束を取る様にと命じた。

「ごめんなさいね、でもどうしてここに？」

「ゼロライナーなら過去で消えてもなんとかなるからな」

時間は掛かっちゃったが…

「…そうね、で、探してたらアクアたちに捕まったの？」

「…ああ。」

『時の砂漠で彷徨ってたから連れて来たの』

どうせゼロライナーが暴走でもしてるんじゃないかってスズがいうから。

アクアはあっけらかんとさも当然のように言い放った。

「あいつがまた良太郎にちよつかいかけてるみたい。」

行きましょう。

「デネブもあっちにいるみたいだしな」

侑斗はゼロライナーに乗りこもうとする。

「待って…私もこっちに乗っていいかな？」

諒夏が唐突にそう侑斗に言った。

「丁度いい、俺も聴きたい事がある」

乗れ。

「アクア、どうする？」

『私は涼夏と一緒にだよ。』

いつでもどこでもね。

侑斗を観るともう中に入ったのかゼロライナーが動き出しそうだった。

『じゃね、スズ。』

『どうせ同じ路線だから』

後で会えるよ。

行こう、紫闇。

「そうね」

行きましょう。

クロスライナーとゼロライナーが走り出すのを時空王は部屋から見つめていた。

『確実に未来は変化してますよ…お二人さん。』

でも、最後の切り札は貴方たちが持つてるんですからね。  
それを忘れないでください。

時空王の腕には古びた懐中時計。



そして、その机には…一枚の写真が…

光の反射角度で見えはしないが古い写真である事は間違いない、小さな女の子が二人、そして男とその隣で幸せそうに笑う

青年が一人…どこか大人びてはいるが面影が…誰かに似ていた。

「聴きたい事ってなあに？」

諒夏の言葉に操縦をアクアに任せた侑斗は座り込む。

「お前らは一体何のためにイマジンと契約を交わした？」

「良太郎から聞いてないの？」

「ある程度はな」

「…契約の内容までは覚えてないの。」

諒夏は首をかしげた。

ただ、覚えている事は一つだけ。

「私と紫闇が物心ついたときにはもう私たちはクロスライナーにいたってことだけ」

そこにスズやアクアがいた。ただそれだけなの。

侑斗は納得がいかない様子だったが、次の話題へと言葉を繋げる。

「あの男は何者だ？」

「カイっていう奴ね、分からないわ。イマジンの世界を作りたいみたいだけど、

今の所、有力な情報がないのが現状ね」

「なぜ俺を消そうとしてる？」

「…それも聴かなかったの？」

「…忌み嫌ってるっての感じたけどな」

それ以上はわからねえよ。

「あの未来の路線が続く場所がきつと関係してるんだと思う」

「未来の路線？」

「そう、大人の桜井侑斗が作り出した路線。未来を変える為の決死の策」

「お前…」

侑斗は確信した。

こいつは俺とあいつ（大人の桜井侑斗の事）を知っていると。

「何処まで知ってやがる？」

『そうね、あの桜井侑斗が護ろうとしてる者と代償かな。』

それ以上はノーコメントだけど。

諒夏の言葉に侑斗は目を伏せ、壁に身体を預けた。

『それと…これ。』

諒夏が手渡したのは前も貰ったカード。

『貴方の記憶もきつと消えていくでしょう、大人の桜井侑斗の記憶だけではもう戦えない』

これからは貴方の記憶も消えていく。  
特異点じゃないあなたの大切な記憶も。

「……」

『でもまだすべて変わったわけじゃない。少なくとも良太郎やハナさん、私や紫闇の記憶は消えない』  
特異点だから。

すべての者に影響を与える事も私たちには関係ないから。

「…そうか」

『ええ、それに、私達も彼らと同じだから』

「…同じ？」

『未来が変われば…その存在すらなくなるかもしれない』

「だってお前ら、特異点だろう？」

諒夏の言葉は侑斗に衝撃を与えた。

いや、矛盾を起こしたといえいいのだろうか？

『そう、私たちは確かに特異点だわ、実際、私達がいた未来が消滅しても存在しているんだもの』

「ちよつと待て、お前ら…未来の人間なのか？」

侑斗は驚きに呆気にとられている。

「…みたいよ。言っただでしょ？覚えてないって。だから聴いた話」  
時空を統べる王…からね。

未来から来た特異点。

あのハナとかいう女もそうだったって。

だが、あのハナという女は早くも影響が出始めている。

結果、あんな小さな姿になってしまったというのに、この二人にはその傾向はなさそうだ。

一体どうなってるんだ？

『未来が変われば…すべては変わる。』

今まで存在していた未来は変わってしまう。  
でも、

『きつと良太郎は変わらない。』

強くはなるだろうけどね。

本質は変わらないから…

『だから、あなたもどうか見失わないで…』

絶望に支配されないで…

諒夏の言葉に侑斗は静かに頷いた。

『りよおかあ…、そろそろ着くよ…』

車内放送でアクアの声が聞こえる。

きつとあのカイとかい男もいるだろう。

「アクア、すぐ準備して。」

『りよおか…い』

諒夏は侑斗を観て数枚のカードを取り出した。

『私がしてあげられるのはこのカードを渡す事だけだから』

「これは…一体何のカードだ？」

『記憶を失わないカード。失われた時間を取り戻すためのカード。』  
そして、あいつが読めない…切り札の為のもの。

『あなたを排除する事があのカイとか言う男の目的なら、全力で阻止するだけだもの』

未来は変わってもハッピーエンドは変わらないってね。

そうじゃなきゃ、良太郎が許さないでしょ？

諒夏の言葉に侑斗は苦笑いを浮かべた。

「確かに…」

『じゃ、頼んだよ。』

桜井侑斗君。

作られた未来はいらない。

悲しい歴史はいらない。

自分に出来る精一杯の事をすればいい。

たとえ、それが自らの存在を消す事になっても…

『諒夏あ〜？』

どーしたの？

ゼロノスが走り去った後、クロスライナーに戻った諒夏。

良太郎が変身してあいつら二匹を倒してしまったので変身する暇もなく、紫閻達はクロスライナーで時空を走っていた。

座席に座り、外を見つめる諒夏にアクアが近づく。

「うっん、なんとなくさ、いつまでこうしていられるのかなって」  
ただ想っただけ。

『…諒夏…』

「ん？」

『忘れないから…私』

馬鹿だけど、絶対二人の事私とスズは覚えてるから。

「ありがと、アクア」

『えへへ』

頭を撫でられているアクアを見てスズは想う。

”消えるなんてこと、絶対にさせないから…”

紫闇もさつきから上の空。

きっと原因は諒夏と同じだろうと想う。

忘れられるのは悲しい事。

そして消滅するかもしれないって聞いたんだと想う。

でもそんなの、僕達だって同じ事だし、きっと消滅しても忘れないよ。

『ねえ…紫闇』

「なあに？スズ…」

コーヒー飲まない？

「…貰おうかな。」

『了解。涼夏もどう？』

「コーヒー飲まない？」

「あ、カフェオレがいい」

『私も〜〜VV』

いつも力キ氷しか食べないアクアがコーヒーを飲むと言い出した事に三人は驚く。

『なによ〜〜。』

「いや、アクアもコーヒー飲めたんだ…」  
知らなかった。

『普段は飲まないよ〜〜。でもカフェオレは飲めるんだ〜 この前涼夏に貰って飲んだら飲めた〜〜』  
だから平気なの〜〜。

につこり笑顔のアクアにどうでもいいようなスズ。

「そっか。」

じゃ、カフェオレ2つにブレンド二つでよろしくね、スズ。  
紫闇の言葉にスズはキッチンに向かって歩いていった。

準備をしながらスズは想う。

”二人を消す未来なんていない。”

僕等が消えるのはまだしも、あの二人を消す未来なら…

変えてみせる。

僕らの契約だから。

契約者との契約はイマジンにとって大切だから。  
なんとしてでもかなえなくちゃいけないから…

未来が変わってもそんな僕らには関係ない。

君達とどれだけの時間を過ごしてきたと想ってるの？

絶対に変えさせないよ…悲しい未来なんていないんだから。

『あのカイとかいう男の事…調べられないかな？』  
スズ…

いきなり近くに来たものだからスズは驚きの表情。

『脅かすなよ…アクア。』

『ん…、で、どう？』

調べられないかな？

『……やってみるよ。』

アクアは？

『ん…、とりあえずあの桜井侑斗の大人の方…監視しとく。』  
だって危ないじゃない。

『じゃあ、そっちは頼んだよ。』

もちろん、二人にはばれないようにね。

『りよおかい^^』

悲しい未来なんて…

いらない、見せたくない。



あの二人の悲しい顔なんて見たくないから…

だから僕達が…

だから私達が…

貴方たちを必ず護るから…

## 変わり行く運命（後書き）

これからどうなっていくんでしょうね？

桜井侑斗（大人）と青年の桜井君。

そして、スズとアクアの契約者って？

時空王は一体誰の事言ってるんでしょうね？

## スズとアキラの苦手な人（前書き）

突然、ステーションに現れた謎の女性。

駅長室に入り、駅長をも困らせるその女性とは？

## スズとアクアの苦手な人

『…これは…困った事になりました…ねえ』  
ステーションの駅長は冷や汗を掻きつつ、目の前の相手に視線をやる。

『いいから、さっさと呼んで頂戴』  
目の前に居る女性はぶうと頬を膨らませて駅長をにらむ。

『一応連絡はしてみますがね…』  
来るかどうかは相手の方次第ですよ？  
そついいつつ、近くの受話器を取った。

数分後

『一応伝えましたよ。』  
『で来るわよね…。』

来なかったらどうなるか分かるわよね。

とでも言いそうな女性に駅長は苦笑いを浮かべた。

『今は学校の時間らしいですから』

ここには来られないそうなんですよ。

『ならクロスライナーを呼んで頂戴』

それなら呼べるでしょ？

つつつか呼べますよね？

駅長さん。

につこり笑顔を浮かべているが、実は笑ってない。  
ちよっぴり額に怒りマークが…。

『…まあ、呼べない事もないんですけど…』

『呼んで頂戴。』

お願いします。

言葉ではそう言っているが、駅長にはそうは聞こえず…  
冷や汗をハンカチで拭ってしまうほど…

所変わって、クロスライナー。

『…っていつか誰から?』

アクアが受話器を戻したスズに向き直り、スタスタと席に座った。

『スズ?』

『…………た…』

『ん?』

誰?

『あのお方だよ…』

『あのお方?』

誰よ、それ?

首をかしげるアクアにスズは慌てふためく。

『あのお方だよ!…忘れたのかい?アクア…あのこわく…い方!』

スズの慌てぶりに目を見開くアクア。

『マジで!?!』

っていつかあの世界消滅してないっけ?

驚きに呆然とするアクア。

『そつだよ、そのはずだよ、だからいる訳がない、そのはずなのに…』

今電話があつたんだよ。

『うつそ…マジで?』

つていうかなんて答えたの?

ねえ、スズ。

『一応二人は学校行つてゐるから断つたけど…』

あの様子だときつと、いや、絶対クロスライナーに乗り込んでくる。

『やばくない? 殺されちゃうよ〜』

『でもステーションをのつとられてるみたいだし。』

『……良太郎にもあんまり合わせないほうがいいよね?』

つていうか絶対。

『だよね、一応、アクア、ゼロノスと良太郎をなんとかライナーに戻さないように伝えて』

『それから紫闇と諒夏もだね』

『よし!』

二人は今までにないくらい瞬敏な動きで行動を開始した。

所変わってゼロライナー。

『はい？もしもし？』

『もしもし、デネブ？』

『あゝ、アクアさん。』

どうかしました？

デネブは受話器越しに『それで？』とか『ハア。』とかをつげ、受話器を置いた。

「デネブ…誰からだ？」

丁度ゼロライナーで昼食中だった侑斗。

デネブが考え込むのはいつもだが、最近はありすぎて逆に不自然な行動だったらしい。

『いや、それがね…』

デネブはアクアから連絡があり、至急侑斗に諒夏と紫闇の元に行つて欲しいといわれたことを告げた。

「何で俺が行かなきゃいけないんだよ！」

俺は行きたくねえ。

そついう侑斗にデネブはんぐと考える仕草をした。

『なんか、やばい事が起きるからって』

言ってたんだけど…

「やばいことってなんだよ」

『未来が変わるとか…』

「未来が変わる？」

『たぶん、電妃としての何かだと想うんだけど…』

「……………」



それ以上は分からないといったデネブ。

侑斗はもっていた茶碗の中身を急いで食べ終え、口元を布巾で拭う。

「で、何処行きや逢えるんだ？」

「もうすぐ停車時間だから、そこから数十分の……」

場所の説明をすると侑斗は「わかった」と言っつてその場を後にした。

同じようにデンライナーでは連絡を受け、良太郎が出かけていく事になった。

所変わって、諒夏と紫闇の学校前。

「ってことなんだ、悪いけど、二人を合わせるわけには行かないか

らさ  
』

そっちでなんとか頼むよ。

スズに言われた紫闇から事情を聞いた諒夏。

「でも誰が来るんだろうね？」

桜井さんじゃないみたいだし…

「時空王でもないわよね。」

つていうかあの人はあそこから動かないものね。

「でも待ち合わせがなんで遊園地なのかな？」

「さあ？」

紫闇達は学校帰りである。

もちろん、大学なので私服だ。

だからおかしくはないのだが…

「つていうか初めてだよね。たぶん…」

遊園地とかつて。

「…そうだね。」

来た事ないもんね、うちら。

いまさらなことに気づいた二人。

遊園地で見かける親子連れ。

でも二人にはそんな記憶さらさらない。

あどけなく笑う子供を観る二人…

その視線には少し羨ましさが見えた。

「とにかく、二人が来たら中入ってみよ？」

ね、姉さん。

「…そうだね。」

苦笑いを浮かべる紫闇。

そして、それに笑顔を浮かべる諒夏。

『あ、おーい。』

手を振る良太郎。

その横でぶすつとした侑斗。

「二人とも遅いよ〜」

「っていつかいつになくぼろぼろだね、良太郎君」  
またなんかあった？

普通の侑斗とは対照的に服に所々砂がついていたり、破れていたリ…

「野上の奴、つくづく運がない」

毎度の事だけどな、さすがに。

侑斗は諦めているようだ。

「あはは…まあね。」

とにかくここに居ても仕方ないし、中入ろうか。

良太郎の言葉に二人は頷き、侑斗もそそくさと着いていった。

未来が変わるってどういうことだ？

聴きたい事は山ほどあるけど、今はこいつらについていくしかない。  
侑斗は少し肩を落として自らを落ち着かせた。

所変わって、クロスライナー

『ようこそ…』

駅長のところに着いたスズとアクア。

二人が来たことでようやく開放されると想ったらしく、安堵のため息が聞こえた。

『お待ちですよ。』

お二人を。

『……お久しぶりでございます』

スズが口を開くとむすっとした女性。

『貴方じゃなくて、二人はどうしたのかしら?』

『…それが、二人は友達と出かける約束があるってさっき連絡したら言ってまして…』

アクアもいつもとは違い、ちゃんとした口調だった。

それだけでこの女性がとても二人にとっては目上の人という感じで…

『まあ、二人は無事なのね。』

『ええ。契約は続行中ですから。』

『…そう。』

ほつとしたようなその女性の表情。

『二人が無事ならいいんだけど。』

ちゃんとご飯食べてる? 病気とかしてない?

色々と質問を続けるその女性に二人はあたふたしながらも二人の近況を報告し、

女性に気を遣って言葉が続けた。

万が一、二人の住んでる所を見たいといわれても大丈夫なように良太郎と侑斗を追い出したし、

部屋も片付けた。

そして、クロスライナーだけ、別路線を今走らせている。

デンライナーとゼロライナーとは別の路線を。

『そお、安心したわ。』

あゝよかった。

笑顔をようやく浮かべた事に安堵するスズとアクア。

『お方様も早く戻らないと夕方の仕込み…できないんじゃないですか?』

アクアがもつともらしい事を告げるとにつこり笑って持っていた紙袋を差し出す。

『そうなのよ、で、二人にこれ、食べさせてあげたくって  
持ってきたの。』

入っていたのはタッパが四つ。

『こっちがシチューで、こっちがカレーね、それでこっちが煮物で  
…』  
こっちがロールキャベツ。

さつきとは打って変わって笑顔の女性にアクアが素直にそれを受け  
取った。

『では、駅まで送りますよ』

『いいわ、今度は二人に逢いに来るから』  
じゃあね。

駅長さんもお邪魔しました。

笑顔で去っていく女性に一同、ドアが閉まったと同時に座り込んだ。

駅長と二匹のイマジンが倒れこんだとは梅雨知らず、その女性は笑  
顔で未来行きの列車に乗り込んだ、

『…助かりました…』

駅長の言葉にスズとアクアが苦笑いを浮かべる。

『僕らも助かりました…』

こちらこそどうも。

『それにしても…』

あの女性は元気ですね。

消滅したはずの未来にいた女性。

でもなぜか未来に存在し続けている女性。

そして、アクアやスズと契約の事まで知っている女性。

『時空王の差し金かな？』

これって。

ね、スズ、どう想う？

『ボクに聴かないで…』

お願いだから…

頭痛くなってきた。

頭痛がすると額に手をやるスズ。

『駅長、時空王から連絡は？』

『いえ、聴いていませんよ』

『ふう〜ん、じゃ別件かな？』

『それにしても…それどうするんですか？』

ここにおいていけないでくださいね。

一概にそういわれ、アクアは手元の紙袋を凝視。

『スズ…どうしたらいい？』

『…折角だからデンライナーに持っていくか。』

犠牲者は僕達じゃないほうがいいよね？

『そうだね、それに諒夏たちもきつと居るだろうし。』

でも、夢壊しちゃうかな？

” お母さんがこんなの作る人だってわかったら。”

アクアの言葉にスズは苦笑い。

そう、あの女性は実は諒夏や紫闇の母。  
契約した時に消えたはずの二人の実の母親。

『未来が変わって…ということですかね』

『たぶん、分岐点が変わって、でしょうね。』

あのお方は消えなかった未来があるという事。

消えた未来にいたはずの人間が居るという事は、別の未来から来れたってこと。

そして、その原因を作ったのは一人。

桜井侑斗だ。

『変わり行く未来があるというのは別の視点から考えるととてもいいことですよ。』

でもそれをいいとるか、悪いと取るかはその人自身の問題ですけどね』

まあ、破壊されずに済んで今回はよかったですね。

『ご迷惑をおかけして申し訳ありませんでした。』

『いえいえ、実質的な被害はなかったわけですし。』

どうということはないということ。

駅長の言葉にスズ達は苦笑いするしかできなかった。



そして、その日の夜、デンライナーに2人が持ってきたモノを観た  
一同が目を見開いた。  
それがどうしてなのかは、別の機会に…

## スズとアクアの苦手な人（後書き）

実はアクアとスズの契約者の母親。

つまり、紫闇と涼夏の母親なんです。

口調で誰だかわかるかもしれませんね。

しかも侑斗と良太郎に合わせたくないというのがヒントです。

## 異点（前書き）

クロスライナーである女性が居る頃、紫闇と諒夏は良太郎と侑斗とともに遊園地にきていた。

二人ともはじめての場所に戸惑いながらも二人と会話をする。そこで新たな疑問、そして矛盾に気づく

## 異点

遊園地…なんて始めてと呟く二人。

「そう…なんだ」

ちよつと意外かも…

良太郎の言葉に二人は首をかしげた。

「いや、女の子ってこういう所好きだと想ってたから」  
「…例外はいるけどな」

侑斗の言葉にそれが誰だかわかった三人。

もちろん、それに侑斗も含まれるが…

「とにかくさ、色々乗ろう」  
せつかくだし。

良太郎が沈黙を続けさせないように言葉を続けていく。

最初に乗ったのは絶叫マシン。

良太郎以外は普通な顔。

次に乗ったのはコーヒークップ。

良太郎は落ちてくるくる回る所を必死に立っていた。

そして、次第に良太郎がため息をついてふらふらになる頃…  
観覧車に乗る事に…

「ちょっと、良太郎君、大丈夫？」

紫闇の支えでなんとか乗る事に成功。  
それに続いて侑斗、諒夏と続いた。

「で、聞きたい事がある」

侑斗は扉が閉まると同時に腰掛、座る二人を見つめてそう告げた。

「何かしら？」

「お前らは未来から来たんだよね？」

「え？そうなの？」

良太郎は初耳だったらしい。

「そうね、そうなるわね」

紫闇がそう呟いた。

聞いた話というのはあながち間違いではないようだ。

「で、聴きたい事ってなあに？」

「お前らの事、つまり未来が変われば存在しなくなるって前にお前  
言ってたよね？」

諒夏をじつとみてそう呟く。

「ええ、そうね。」

「それはどういう意味だ？」

「どういう意味もなにもそのままでしょ？」

普通に考えて。

紫闇の言葉に侑斗が苦虫を踏み潰したような表情になる。

「未来が変われば私たちは存在そのものがなくなる可能性のほうが  
高いという事」

ただそれだけ。

紫闇の言葉に良太郎が今度は声を荒げた。

「そんなの……」  
まだ決まってるじゃない。

だが、紫闇や諒夏は外を見つめ、淡々とした口調で呟いた。  
「決まってるの。私たちが居た未来が存在しない、いつ居なくなる  
か分からない」

だって存在そのものが不安定なのだから。

「だが、特異点なんだろう？」  
お前ら。

侑斗の言葉に紫闇が頷く。

「誰にだって、何にだって例外はある。」

今が存在するのも異点なのよ。

「私達が教えられた未来ではない、もう路線の近くまで来ている  
なもの」

だからあのカイって青年だって焦ってる。

諒夏の言葉に良太郎は首をかしげた。

「カイっていう青年が持つてるのは黙示録。」

つまり、過去、現在が見える物。

諒夏が淡々と答える。

「そして、その黙示録に存在していてもそれを変えようとするモノ、  
それが桜井侑斗」

「ねえ、その黙示録って一体……？」

「良太郎君、その出所さえ分かったら私達だってこうしてないでし  
よ？」

紫闇の言葉に良太郎は思わず黙り込む。

「つまり、あの黙示録は現在と過去を結ぶ物だってことは分かった。」

「だが、なぜそれが俺とかかわりがある？」

侑斗の言いたい事ももつともだ。

「桜井侑斗だけが変えられるからよ。ゼロノスである彼だけが…」  
すべてをリセットするという意味を持つゼロノスという存在だけが  
異点。

そして、それをサポートできるのは電妃。

「でも実際の所、私達も実感も証拠もないの」  
話を聴いたのスズとアクアに。  
そして、時空王。

「前から言っているな…」  
その時空王というのは何者なんだ？  
なぜお前たちに干渉する？

侑斗の疑問は最もだった。  
良太郎でさえ、逢った事がない人。

そして聞き覚えのない人…

「時空王は時空の狭間に落ちていた私達を拾い上げたと聴いてた。」  
でもそれだと矛盾が起こるの。  
紫闇はそう呟いた。

「矛盾？」

良太郎は首をかしげる。

「ええ、一つは私達とスズやアクアの契約。これは小さい頃に行われた物だというのも矛盾」  
小さい子に何を欲しいかなんて聞いたってたかが知れてるでしょ？  
「それを一切覚えてないのも不思議。」  
そして、私たちの両親の話は一切しないの。

時空王も…そして、スズたちも…

紫闇と諒夏の言葉に2人は首をかしげた。

「イマジンのやつらに聞けばいいんじゃないか？」

あのスズとかいう奴ならまだしも、アクアとかいうイマジンはしゃべりそうだが？

侑斗の言葉に諒夏は首を横に振る。

「答えてくれないの、ただ、あのお方だけは怒らせると怖いってただそれだけ。」

「怒らせると…」

「怖い？」

良太郎と侑斗が顔を見合わせる。

「それに、一つ気になる事もあるのよ」

諒夏の問いに観覧車を降りた3人が振り向く。

「未来で確実に何かが変わってる、そしてその分岐点である桜井侑斗、でもそれって違うんじゃないかって」

最近想うの。

諒夏の一言に良太郎は「どういうこと？」と呟いた。

「考えてみて？桜井侑斗が過去を飛び回るのはどうしてだと想う？」

それもイマジンが居る時間に必ず居る。

「それは…」

良太郎もそこはずっと引っかかっていた。

どうして桜井さんは過去に居るのか…

そしてなぜ、自分たちの前から姿を消すのか…



どうして侑斗にカードを渡し続けるのか…

「謎はまだあるわ。あのカイとか言う青年がいう、分岐点がもし桜井侑斗じゃないとしたら？」

誰かが未来の路線に繋がる分岐点の鍵だというの？

紫闇の言葉に一同止まる。

「とりあえず、桜井侑斗の事はこちらでなんとか調べてみるわ。今日は楽しかったわ。ありがとう。」

紫闇と諒夏はクロスライナーに戻る為に更衣室に一室に入っていた。

ちょうどクロスライナーではお客が一人降りる所だったようで…

『あ、おつかえり〜』

アクアがにつこり笑って何かをほおばっている。

「ただいま、何食べてるの」

『ん？わらび餅だよ〜』

諒夏も食べる？

差し出すわらび餅に諒夏は口をあけた。

「ねえ、スズ、聞きたい事があるの」

紫闇の言葉にスズはコックピットへと誘った。

コックピットのドアを閉めたスズは外部に漏れないように声を遮断

した。

「私たちに何か隠してない？」

『…別に何も隠してないよ？』

変な紫闇。

どうしたのさ。

「私達をあの場合に誘ったのも何かの理由があるわけでしょう？」  
帰ってこられるとまずい事が…

紫闇の言葉にスズはため息を一つ。

『考えすぎだよ。整備してたんだ、クロスライナーをね。』

「ここを？」

『ああ、観て、新たな路線がもうすぐ繋がる。』

その前に少しパワーアップさせておかないとね？

そういうスズはいつもと同じように見える。

だが、なんとなく違和感が纏わりついて…

「なにかやっぱり隠してる」

何年一緒に居ると想ってるの？

これ以上何か嘘を言ったら許さないというような紫闇にスズはため息を一つ。

”なんで知られたくない時にばかりこう鋭いんだろう…”  
と。

『……新たな路線からお客が来たんだ』

「お客？」

『今はまだ逢わせたくない人。でもそのうちきっと逢わせるから…』  
だから、それまで待つてくれないかな？

そう呟くスズに紫闇は納得行かない様子。

だが、ここまで来て、それでは引き下がれない。

「どういうことなの？スズ…ちゃんと説明して。」

『…時はまだ…満ちていないから』  
教えられない。

スズがコックピットを去った後、紫閨はただ、新たなる路線をそこから眺めていた。

廊下で立ち尽くすスズ。

「ごめん…ごめんなさい…紫閨。」

でも、逢ってしまったら、キミ達はきっと選んでしまう。  
最悪の方法を…

そして、知ってしまう…

この世界の異点が桜井侑斗ではないということを…

そして、知られてしまったてはキミたちが消えてしまう。  
だから、教えられない。  
知って欲しくない。

キミたちヲウシナイタクナイカラ…

契約なんてどうでもいい。  
キミたちを護れるなら…

あんな未来なら…

変わった方がいいんだ。

スズはただ、クロスライナーの車窓から流れ行く景色を見ながら  
そう想っていた。

## 異点（後書き）

どうでしょうね？

侑斗は知ってるけど、いえないみたいな感じですね。

っていうかたぶん聞いていてもその時間に行きたくないっていう感じ  
じです。

そして、スズ、知られたくないんですよ、きっと。

## 知られざる過去（前書き）

カイという青年によって変わる未来…

だが、分岐点となる者の存在を知り、それをフェイクしていた桜井悠斗。

その事実を知った時、電妃の二人は…

## 知られざる過去

…なるほどね。

イマジンとしてデネブを選んだのも…時空王の仕業だったわけなのね。

紫閻はその一部始終を見て、そう想った。

デネブがカイを裏切る事を見越し、そして、彼らと出会わせた。そして、少年である桜井侑斗に戦わせる事も。

「諒夏も私もずいぶんと遣われたわけか」

「…紫閻…」

「良太郎君もなんとなくわかったんじゃない？」

そして、未来への分岐点も繋がる…

彼の記憶云々では。

「どうするわけ？」

具体的に。

「とにかく、大人の桜井侑斗に逢いましょう」

それから、諒夏に連絡を。

踵を返し、クロスライナーへと歩き出す二人。

” 少なくとも…この時間のあのお方はご存知と言っわけか。”

そして、必死に護ろうとしてる桜井侑斗も。

本当に時空王も憎い演出をしてくださる…

スズは空を仰ぎながら心の中でそっと呟く。

クロスライナーが到着後、すぐドアが開き、中に入った二人を待っていたのはア

クアだった。

「アクア、諒夏？」

「あ、おつかえり〜」

アクアが手招いている。

そこにいたのは大人の桜井侑斗。

「…貴方…」

「さつき、拾ってきた」

えらい、ねえ。

アクアがにっこり笑顔を浮かべる。

「…じゃあ、あなたはクロスライナーで？」

助けたって事？

紫闇の問いにアクアはにこつと笑顔を浮かべる。

「…相当のダメージを受けてるけどね、でもカイが気づいたみたい」  
本当の分岐点が誰かってこと。

「…そうみたいね。でも大丈夫よ。」

そのために彼、傷ついても過去へ行くって。

「…そう。」

今は倒れている桜井侑斗。

それに愛理さんが何か知ってるみたい…

紫闇の言葉にスズとアクアが目を閉じた。

時は一刻を争うか…



桜井侑斗を過去の時間で下ろした後、スズとアクアが紫闇と諒夏の前に座る。

「あのね、話さなきゃいけない事があるんだ…」  
スズがそう切り出した。

「なあに？突然」

それに諒夏と紫闇は首をかしげる。

「まじめに聞いて欲しいの」

あのね。

アクアが珍しく本気口調なのは重大なことなのだろう。

そういう時以外、まじめにならないから…

「未来が変わりつつある…って事は知つてると想うけど…」

「それに、もしかしたら貴方たちがいない世界かもしれない」

その未来は…

でもね、愛理さんが言ってた言葉…

『過去が希望をくれる』

その言葉は、時空王が言ってた言葉なんだよ。

アクアとスズの言葉に眉をしかめ、驚く二人。

「二人に逢わせる必要が出てきたんだ」

どうしても、もう一度、時空王と。

「どういう…こと？」

時空王と逢わせるとか？

私達が消えるとか？

愛理さんの言葉が時空王と同じとか…

「説明してよ、スズ…」

「一体どういうこと？」

「…僕は契約したんだ…」

「幼いキミ達ではなく、主と。」

「…契約？」

「私達じゃなくて？」

「…話さなきゃってずっと想ってた」

「でもいえなかった。」

「全然未来は変わらなくて…」

「もしかしたら過去の二の舞になるんじゃないかって。」

「特異点の二人なら大丈夫だろうけど…」

「でもそれでも予備を残しておくに越した事はなかったから…」

「…アクア…スズ…」

「声が聞こえた…それは桜井侑斗の声だった。」

「…お帰りなさいませ」

「…やっぱり変わりませんでしたか…」

「過去は…」

「…ああ…」

「そういうと椅子に腰掛ける。」

「二人にはボクから話そう」

「…すみません。」

「幼いお前たちを拾ったのは時空王だ」

「…私たちを拾った？」

「桜井侑斗は語った。」

「自分が過去であるのカイという奴が連れていたイマジンに負け、過去

が消滅した時

、愛理の記憶と共に時空界と

つながり、そしてあの時自体を時空王が止めたこと。

そして、あの時、すでに愛理のお腹には子供がいた事。

「…もしかして、それが…」

紫闇と諒夏が顔を見合わせる。

「私達？」

「…双子だと聞いていたからまず間違いないだろう」

「じゃあ、なんで…」

「あの時間が消滅したらキミ達は生まれない…そして壊れてしまうから…」

だから頼んだんだ。

自分の代わりにあの二人を…と。

「私たちの名前を…託したのも？」

紫闇が神妙なおもむちでスズを観た。

『…そうだよ、桜井侑斗の…彼の言葉と時空王の意思』

僕らは声を聴いただけだけど…

”俺達の子供を助けて欲しい…”

”悲しい過去はいらない、悲しい歴史もいらない”

必ず、変えて見せるから…だから…

どうか子供達は奪わないでくれ…

「その願いに乗じて時空王はキミ達にクロスライナーをくれた。」

そして、彼らも。

『私達の手のひらに降りてきた子供達…』

そして天使と思い描かれた私たちの身体…

契約は貴方たちを護る事。

何者からも、護る事。

「良太郎と会ったのは？」

「アレは…過去が変わりつつある現状でそうなってしまった」

良太郎君には悪い事をした。

もちろん、過去の自分にも。

「デネブに願った事って…」

「桜井侑斗…俺自身の過去の自分を助け、戦わせる事」

それ以外に変える方法がなかったから…

「じゃあ、私達は…」

良太郎とは従兄弟になるの？

「…そうなる。」

「でも電王の妃って…」

言ってなかった？

従兄弟なら血縁関係があるから妃には必然的になれない。

なら、なぜ？

「電王の妃というのは間違いない。電妃…それが異点となり分岐点

の一つの鍵と

なってるのだから」

桜井侑斗が言ってる事がわからない。

それなら電妃という存在価値……  
そして意味がない。

「分からなくなってきた……」

紫闇は頭を抱え、諒夏はぽかーんとしている。

「次の乗車駅で……逢わせたい人がいるんだ」

桜井侑斗の言葉にアクアとスズは目を閉じた。

そう、結末は変えなきゃいけない。

それがもし、自分たちを消す事になっても……

そして、紫闇と諒夏に逢えなくなっても……

もう過去は変わる方向に向かっている。

そして、未来も……

二度とつらい思いをさせないために……

”たとえ自分たちが消えても……”

あなたたちを護るのは契約だったからじゃない。

私達がともに過ごしてきた時間、すべてが大切だから。  
護りたい……

ただ、それだけ。

そして…どうか、

幸せに…

それだけが私<sup>ボク</sup>の願いだから…

## 知られざる過去（後書き）

桜井さんと二人の関係…、そして時空王という存在。  
絡まって…絡まって今があります。

そして、二人のイマジン。  
契約って？

そして…物語はクライマックスへ近づく

きつといつか・・・どこかで（前書き）

きつといつかどこかで・・・のほづがあつてゐる気がしました。



きつといつか・・・どこかで

過去…

現在…

未来…。

時の砂漠と呼ばれる世界を走っているクロスライナー

そんな景色、見慣れているはずなのに、なぜだろう、不思議と居心地が悪い。

奇妙な違和感。

その正体はさっき言われた言葉。

桜井侑斗が自分達の父親だと。

そして、母は野上愛理。

信じられなかった。

いや、信じたくなかった。

だが、それで今までつじつまが合わなかった事にピースがうまったような気持ち、

でもまだしっくりこない。

長い間そうだったからかもしれないけど。

「父親と母親か・・・」

紫闇と諒夏は車窓から外を眺めつつ呟いた。  
桜井はというと、コックピットからクロスライナーの先を眺めていた。

あんなことを言わない方がよかったかもしれない。  
帰って二人を混乱させてしまつとわかつていた。  
だが、言わずにはいられなかった。

未来が変わつたら二人は…

だけど、もう一人特異点がいる。  
例外がないわけじゃないんだ。

…デンライナーのハナさん。  
スズとアクアにはなんとなくだが判つた。  
あの子がいる未来は消滅した。  
それは諒夏と紫闇と同じ。

でも、あの子だけが違う事…

そう、あの子も桜井悠斗と愛里の子だ。  
未来の…

諒夏と紫闇とは違う別の未来の子供。

そして、変わり行く未来の本当の鍵。

二人は消える…

未来に彼女たちの姿はない。

なぜなら…二人がイレギュラーな子だから。

破滅の未来が生んだ物。

それが二人だから…

「アクア…」

「スズ…」

どうしよう…

二人のイマジンはたそがれた。

時は刻一刻と二人の消滅を待っている。

あのカイとか言う男もイレギュラーな人物。

アクアはあのカイっていう男に逢った途端その事がわかってしまった。

イレギュラーな人物。

存在を許されていない物。

過去に影響を及ぼす悪意的なものを持つ者。

そして、イマジンを動かし、未来を破滅へと向かわせる言わば先導者。

だけど、未来はもう決まった。

この時代の野上愛里と桜井悠斗によって。

そして時間を変えろという禁忌を犯し、その罪を背負い消えていく桜井悠斗の存在。

そして消える、二人の子供…諒夏と紫閨。

時空王という存在。

「どうする事も出来ないの?」

アクアが必死に言葉を紡ぐ。

だがどうする事もスズ二だっただけ出来ないのだ。

未来はもう選択されている。

そして、道は繋がってしまっているのだ。

もう路線は変わらない。

未来も…

「あとは時間との勝負だね。そして、僕らはただ一緒に居るだけ」  
違う? アクア…

スズの言葉にアクアは泣く。

涙なんてないはずなのに…

それでも目から溢れてくるのは涙…

イマジンのはず…

消えるだけの存在のはず…

だけど… だけど…

「二人は? どうして? 生まれてきたんだろうね?」

幸せになる為じゃないの?

ねえ、スズ…

「アクア…最後まで一緒だよ。僕も、紫閻達も…」

二人だっただけだったはずだよ。

それに、決めたろ?

ボク達が二人を預かった時に…

『この二人を護ってみせる』って。

「だから、どんな結果でもいいじゃない」

だろ？アクア…

スズの言葉にアクアは涙を必死に拭いながら頷いた。

そう、後は僕らの出番じゃない。

未来が決まった時、そして、桜井悠斗が消えた瞬間どうなるかなんてわからない。

でも、きっと未来はどこかしら変わってるから…

もしかしたら二人は消えないかもしれない。

そんな望みを持って…

数日後…

カイが作り出した異次元の空間より世界を護った良太郎君がデ NRA イナーを降りた。

桜井悠斗が消え、平凡な日常が訪れようとしていたとき、ゼロライナーと共に動き出した列車があったという。

そこには幸せそうに笑う愛里と桜井悠斗（大人）と諒夏、紫闇、そしてスズやアクアの姿が逢った事を良太郎は見たのだ。

そして、それをどこかでひっそりと見ていた時空王の姿も逢ったと

か、  
ないとか  
…

きつといつか・・・どこかで（後書き）

彼女たちは消えずにいますが、未来で会えるかは疑問？  
だって消えちゃったし、違うし…イレギュラーだから。  
だからこんな終わり方。  
今までありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5644c/>

---

仮面ライダー電王

2010年10月13日21時13分発行